

Silvia Maria Grossmann

Walter Zschokke

シルヴィア グロスマンの作品へのいくつかの思考

ハンダ用針金、紙、コピーからできた形成物に近づくには、繊細さが要求される。

色薄く、繊細で、ぼんやり透き通っているところもあれば、見通せるところもある。

そのこわれやすさは、私たちが子供の時芸術作品の鑑賞の際 両親に ” 目だけで見なさいよ！ ” とくりかえし注意されたのを思い出させる。

立ち止まり、注意深く見、そして感覚を研ぎ澄ますことを最初から要求される。

彼女の制作方法は（強いてそう言えば 一なぜなら決まったやりかたはないのだけれど）まず彼女によって写真に留められた大都会に溢れる大量の画像から始まる。その大量の画像はその後選択、分解されひとつひとつの小部分が並列、重複されて新しく組み立てられる。

90度あるいは180度に転回した建物の一部分が私たちの視習慣を戸惑わせる。

上下が逆にあるいは土台が側面と入れ替わり、二度三度見てやっと事柄が判る。

この組み立て方は見る人によく知っているはずの物を新しい視点から見せるのである。

正面と裏側で全然違うウィーン世紀末時代の建物の画像が躍動しはじめ、分かれ重複しまたはひとつひとつの細部に分裂し並べ替えられ新しい全体像となっていく。

拡大された写真の複製方法=コピーは日常的であり、安価で安っぽくさえある。

しかしながらそれは正しい手法の写真より目が粗く明暗がはっきりしているため、もっと強くうったえる力がある。同時にまたすすけていて 汚いとさえも云える。 そうしていくつかの細部はあいまいにされている。

この平凡な複製方法は、不必要なオーラを避け 建物の裏側、長いこと修復されていない家々などを思わせる。これは日常的な習慣、平凡な建物の歴史をメランコリックに理想化するのでなく新しい独自の形成物へのただの素材にするのである。

こうしてできた作品は全体像において自由な連想となったり（ ” 翼 ” 、 ” 船 ” 、 ” ダンサー ” ）または

建物の画像の一部分が重ねあわされていき、別の想像上の建物になったりする。（スカイスクレイパー）

建物の一部分は上へ上へと繰り返されることによってウィーンらしくなく高くそびえたっていく。

鉄の支軸の遠近作用か、部分的に切り抜いてあるためか、それとも中心部分と両翼の並べ方で中庭の狭さや階段の吹き抜け部分の引き込まれるような引力作用が表現されるせいか、画像は平面から空間へとひろがっていく。

趣旨は現実から非現実へと飛んでいく。

階段の螺旋が脆い震える形成物に分離されたのは、バーバラ ノイヴィルトの小説で物語られる威嚇的な階段を思い起こさせる。

くり抜かれた形の中、器の中の空間が独自の形式的な意味を持つのである。＊ 例えばそれは圧迫感を感じるような建物裏側の狭い中庭の上に見える空の部分に表される。

こうして画像の内容、形状、第二次シンメトリーによって、解ったと思ったとたん表現を変える変化自在の形状となるのである。

こわれやすく見えるためのみならず、変容する実質のせいもありこれらのオヴジェはつかみどころのないはかないもの、脅やかされているかのようにみえる。 イヌサフラン＝（秋のはかない花）が冬に脅かされるように。

しかしながらこのこわれやすさは、見る人に注意深さをうながし、オヴジェをこうして芸術品として記憶の上で耐久的な物にする、よく計算された上でのことだと云える。

ウィーン、1999年8月

ワルター チョッケ （美術、建築評論家）

＊アーティスト、訳者注

器の中の空間が独立した意味を持つというのは、能舞踊に於ける“間”のようなものである。